

## 木村 太陽(アーティスト)

國府さんに初めてお会いしたのは、横須賀美術館のグループ展でヤノベケンジ氏の展示に彼がテクニックとして付き添っていた時が初めてです。そのときは個人的に話す機会がありませんでしたが、その後、彼の教える大学に一度、講演に呼んでもらいました。そのとき、90年代の“関西ぴあ”に僕たち二人の作品が掲載されたことがきっかけで僕の作品を知ったのだと言ってくれたことと、彼の素直な人柄が印象に残っています。

私の父が版画刷り師として使ってきたプレス機の貫い手を探していた時期に、彼に電話を頂きました。友人が欲しいと言っているが、軽トラでとりに行けるだろうかと聞かれて、びっくりしたものです。というのもプレス機は1、2トンするので業者を頼まないとても無理な、危険性をもたうものだったからです。力仕事ぐらい現場でどうにかなるだろうという楽天さが彼のなかであったのかも知れません。

その電話が彼との最期の会話でした。そのすぐあとに亡くなったので、その元気な声との落差でわかには信じられませんでした。彼とはアートコートギャラリーで二人展をすることになっていて、どんな展示になるのかと楽しみにしていただけに残念です。

彼とは1970年生まれという、同じ時代背景を過ごしてきたところで共感を覚えます。まだ現代美術がマーケット重視になっていない頃の楽天さがあるんだと思えます。虚無的なものを目指してる僕とは違い、彼の作品からは、一貫して作ることが楽しくて仕方がないという、ピュアな喜びが伝わります。パナマレンコのような資質があったのかなと今にして思えます。美術館での個展やビエンナーレ参加など、まさにこれからという時期に断たれてしまった彼の未来が、僕のなかでループになり、消えることはありません。